

## “A Christmas Carol” by Charles Dickens

大人のおとぎ話としての側面から

### 坂 本 静

1870年6月 Charles Dickens の死がイギリス, アメリカ, カナダ, オーストラリアのすべての家庭に伝えられた時, 或る小さな男の子が「Dickens の叔父さんは死んだの? ジャ, クリスマスの叔父さんも死ぬんだらうか?」と尋ねたという話しがフランスの作家アンドレ・モロアの “Dickens” (1927年) に紹介されている<sup>(1)</sup>。些か出来過ぎた話しではあるが, この男の子の言葉は Dickens とクリスマスとの結び付きの深さを如実に物語っていると言えよう。

Dickens が Christmas ものを書き始めた1840年代は「飢餓の40年代」(The Hungry Forties) と言われているように, イギリスは農作物の大不作に見舞われ, 貧富の差が極端に酷くなってきていた頃で, 折しも1843年工業都市マンチェスターに働く労働者の教育と生活改善を図ることを目的とした社会活動の集団, マンチェスター・アセニウムが設立され, 学問と貧困, 無知と犯罪の問題が深刻にとりあげられた。この夜会の席で講演をした Dickens は貧困と無知とりわけ無知が犯罪の根源であること, また, 学問および学習による自尊心を身に着けることの必要性を力説した。Dickens の頭の中に Carol の構想が浮かんだのはこの時であったと言われている。“A Christmas Carol” 第三節の中で現在のクリスマスの幽霊の服のひだの中から引き出されてくる「無知」と「貧困」という名の二人の子供を挟んで Scrooge と精霊との間で交わされる問答には Dickens の当時の社会への痛烈な批判が込められているのである。当時, 月刊分冊中であった “Martin Chuzzlewit” の売れ行きが今一つ振るわなかった為その償いをしたいという気持ちと, 子沢山の家庭と両親や弟妹などを抱え込んでいたために不安定であった生活を安定させたいという期待と打算もあって Dickens はマンチェスターから帰って1週間後から “Martin Chuzzlewit” 執筆の合間を縫って “A Christmas Carol” を書き進めていった。「書き進める内にこの物語の持つ奇妙な力の虜となり, それに引きずられるようにして我知らず筆を進めていった……書きながら何度か涙を流し, 声をあげて笑い, また涙を流しては異常な興奮状態に達した……まともな人がみな寝静まった後のロンドンの真っ暗な通りをこの物語のことを思いつつ15マイル, 20マイルと歩き回ったのも一再ではなかった。」<sup>(2)</sup>かくして “A Christmas Carol” は当時「パンチ」誌の画家として名を成していた John Leech の挿絵をつけて12月19日発行の運びとなったのである。以後 “The Chimes” (1844

年)、“The Cricket on the Hearth” (1845年)、“The Battle of Life” (1846年) “The Haunted Man” (1848年) と次々と発表し、これら5編は1852年“Christmas Books”として一卷本に纏められた。その後も死の3年前まで自らが編集と経営にあっていた週刊雑誌“Household Words”や“All The Year Round”のクリスマス増刊号にクリスマスものを発表し続け、これらも後に“Christmas Stories”として一卷本に纏められた。クリスマスという最大最高の年中行事をその宗教的色彩と祝祭的要素を巧みに織り込みつつ善意・寛容・慈善などを人々に説きつづけた Dickens のクリスマスへの関心は1870年の彼の他界で未完の遺作となった長編“The Mystery of Edwin Drood”の第14章の書き出しがChristmas Eve in Cloisterham でありクリスマス为背景としてプロットが展開することが示唆されていることからわかるように死を迎えるその時まで続いていたのである。

クリスマスを「善意の大祝祭日」(the great festival of good-will)と見做し、人々の間に相互信頼の心と愛し合う心情をもたらし、貧しい人々とも和解してゆくのでなければこの日に相応しい祝いとはなり得ないと考えた Dickens は“A Christmas Carol”では他人の困難や苦しみなど歯牙にもかけない強欲な守銭奴の実業家 Ebenezer Scrooge がクリスマスの前夜三人の幽霊からそれぞれ過去・現在・未来の自分の悍ましい姿を見せつけられ、これまでの行為がいかに利己的且つ冷酷、貪欲なものであったか、またこのままでゆけば如何に惨めな死を迎えることになるかを知らされ、翻然と心を改めるという一種の夢物語を作り上げたのである。その点では「良きサマリア人」(Good Samaritan)の善意を称えた子供向けの教訓談となっている。しかし Dickens 特有の誇張やおかしみを加えた真面目な喜劇の中にちらつく不気味な暗い世界には社会批評をするモラリストとしての Dickens の顔が覗いている。そこには“A Christmas Carol”を人の善意を称えた子供向けの教訓談として片付けられないものがある。本稿では“A Christmas Carol”を「大人のおとぎ話」としての側面から読み取ってみたいと思う。

物心つくかつかない頃から貧しさに苦しめられ、貧しいが故に世間から相手にされず、自らも世間に背を向けて自分の殻に閉じ籠って生きてきた Scrooge が頼るものとして「金銭」を偶像視し、「利欲という支配的な情熱」(the master passion, Gain) (II. p.79) に心を奪われ、「すべてを欲得ずくで測る」(weigh everything by Gain) (II. p.80) ということを「唯一の指導原理」(one guiding principle) (II. P.80) としても無理からぬことではある。その結果は「何年ともわからぬほど長い間の共同経営者」であった Marley の死に際しても「すぐれた商売人ぶりを発揮して相当儲けのある取引きで葬式を荘厳にやってのけた」(I. p.45) ように Scrooge にとっては長年の仕事仲間、友人でさえも心と心の触れ合いを求め合う関係で

はなく、売り買いの対象としての関係でしかないのである。「あらゆる人情に近寄ってはいけないと警告して、人生の混雑した道の中へ割り込んで行く」(To edge his way along the crowded paths of life, warning all human sympathy to keep its distance.) (I. p.47) Scrooge にとってはすべての人間行為の動機は自分の利益に繋がるものであるかどうかであり、その行為が幸福や快楽を自分にもたらすものであれば、その行為は善として是認し、不幸や苦痛を増すものであれば悪として排斥するという徹底した功利主義の哲学に基づいており、そこには富を専心追求するあまり憐れみ、情愛、心の喜びや悲しみといった生活感情の枯死した利己的で無血冷酷な人間 Scrooge が存在するだけである。「如何なる鋼と打合わせても一度だって景気の良い火花を出したことのない火打ち石のように固くて鋭く、牡蠣のように秘密好きで打解けず孤独であった。」(I. p.46) こうなると screw (けちん坊) という語から出ている Scrooge という名をもつこの老实業家を「途方もないけちん坊、絞り取り、振じり取り、掴む、引っ掻き、驚掴む、業突く張りの爺！」(he [Scrooge] was a tightfisted hand at the grindstone, Scrooge! a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous old sinner!) (I. p.46) とまで言い切ることもあながち誇張ではないことがわかる。

ロンドンの取引所ではなかなかのやり手として通っている Scrooge ではあるが、その人間の欠如故に街で挨拶をする人はなく、乞食さえ彼には物乞いをしない。盲導犬までもが彼を見掛けると主人を何処かにそっと引っ張って行きその耳元で “No eye at all is better than an evil eye, dark master!” (I. p.47) と囁くのである。だが彼の甥だけは毎年 Scrooge の事務所 “A merry Christmas, uncle! God save you!” と元気な声をかけながらやって来る。すると Scrooge は “Bah! Humbug! What right have you to be merry? What reason have you to be merry? You’re poor enough.” (I. p.48) と鋭く問い返す。Scrooge に言わせれば「クリスマスとは金もないのに勘定を支払う時で、一つ年を取ったからといってその一時間分も金が入るわけではないことを知る時期」(I. p. 48) であり、日々の生活にも困るような貧乏人が「クリスマスおめでとう！　と言って浮かれ騒ぐのは愚かというより気違い沙汰である。」というわけである。このように言われて甥は、「それじゃ叔父さんはどんな権利があって気難しくなさるのですか、どんな理由があって気難しくなさるのですか、お金持ちのくせに。……クリスマスとは、やさしく、寛大な、慈悲に満ちた喜びの時節で、この時だけは男も女もみな一つになって閉じた心をすっかり開いて、自分より貧しい人を自分とは関係のないあかの他人だなどと思わずに墓場までともに行く仲間だと思える唯一の時ですよ」(I. p.49) と反論するのである。甥のこの言葉の中に、暖衣飽食の金持ち達に向かって、「日頃は強欲無情であってもせめてクリスマスの日ぐらいは恵まれぬ人々に援助の手を差し延べるほどの親切な心を見せてくれませんかねェ！もしそれもお嫌だとおっしゃるなら「クリスマスおめで

とう！」と喜んでいる者達に気難しい顔だけは見せないでほしてものですヨ！」と、やんわりとした Dickens 一流の皮肉が読み取れるのである。更に Scrooge は甥に向かってこう付け加える、「おまえは何故結婚したんだ？ 恋愛をしたからだって？」 Scrooge は結婚などというものはクリスマスよりももっと馬鹿げたものだと思っているのである。

慈善募金を頼みに二人の紳士が Scrooge の事務所を訪れた時も彼等に向かって「わしはクリスマスだからといって浮かれるつもりはない、また怠ける者を浮かれさせる手助けをするつもりもない。……救貧院の運営にも手を貸しているし、そのための税金も払っているのだから。暮らし向きに困るといふのならそこへ行けばよい。……そういう施設に行くくらいなら死んだほうがましだと言ふのなら、さっさと死んで余分な人口を減らしてくれりゃいいんだ。」(I. p.51) と剣もほろろに追い返してしまう。Scrooge に言わせれば勤勉に働こうともせず怠けている連中のための寄付などもってのほかで、彼等が貧しいのは怠惰からくる自業自得のものである。ましてやそのような連中が恋をし、結婚をするなどとんでもないことで、結婚は妻子を養える目途がつくまではすべきではない。これはあきらかにマルサスの人口論を踏まえて言っているのである。“The Chimes”の Richard 青年の言葉を待つまでもなく、貧しい者は一年また一年と待っていても一向に暮らしは良くならず、そうこうする内に何時の間にか年を取って墓場まで行ってしまい、結局一生結婚出来ずじまいとなるのである。(I. p.163)

ところで、Dickens の社会問題に対する関心は“Oliver Twist”(1838年)を以て始まる。ルイ・カザミアンも言っているように、必ずしも Dickens の説いた教への文字通りとまではいかなかったが、精神的には非の打ちどころなく果たしていったのである<sup>(3)</sup>。“Oliver Twist”で新救貧法を徹底的に攻撃し、当時の養育制度の不備とその下に虐げられる哀れな子供の生活を暴露した Dickens は“A Christmas Carol”では新救貧法とマルサスの人口論を槍玉にあげている。

英国における「救貧法」の歴史は古くエリザベス一世の1597年と1601年のあの「血の立法」といわれたものにまで遡る。これは社会の上において力のある者は下の弱い者を労り慈悲を注ぐのがキリスト教徒としての当然の努めであるという考えに基づいており、英国国教会の一つの教区の中で何らかの理由で自活出来ない貧民に法に基づく公的救済を受ける権利を認めたものである。その際救貧対象者を「労働可能貧民」(ablebodied poor)——必ずその教区に留まって労働をしなければならない——と「労働不能者」(impotent)——幼児、高齢者、身体・精神障害者等——に分け、彼等は出生教区で最低限の生活を送れるような救済を受けた。しかしその内容は甚だ厳しいものであったと言われている。この救済に必要な財源としての救貧税は教区内の資産家から徴収された。Scrooge が「救貧院の運営に手を貸している

し、その為の税金も払っている」というのはこのことである。しかし裕福な納税者が多く、救済を受ける貧民が少ない教区、逆に納税者が少なく、貧民が多い教区との間で福祉の内容に不均衡が生じてくるのは避けられない。1830年から1850年という時期は工業化と都市化が進み、イギリスが農業国から工業国に転換し始めた時で人口移動が激しくなり農村人口の激減と過疎化、その反対に工業都市とその周辺の人口過密はまず選挙時の一票の差への不平等を是正し、選挙の区割りを改めると同時に救貧法改正の必要を求めた。こうして1832年6月の選挙法改正法の成立直後から救貧法の修正作業が始まり、1834年改正法案が議会を通過したのである。ところが1832年の新選挙法により新たに議員になった人達は地方出身の旧保守党よりも町を代表して出た革新派、自由党所属の新興ブルジョワジーが多く、1834年の新救貧法も彼等の処世哲学を反映したものとなった。つまり彼等は自分達のように金と社会的地位を獲得したいのなら他人の助けを借りずに、自力で得るべきであり、かつてのような家父長的慈愛精神は真の自由主義に反する。個人が完全に自由平等であるなら他人からの恩恵を期待することは出来ないはずだと主張した。つまり救貧法のもとで保護を受けている人は保護を受けたがためにかえって自立の精神を失い、怠惰を助長することになるというわけである。かくして救貧院外での救助を打ち切り、広い地域を対象に連合救貧院 (the Union workhouse) という施設を設立し、workhouse という文字通り能率的な共同労務所としたのである。しかしこの救貧院は「バステューユ監獄」の別名を持つほどの苛酷を極めたと言われ人々からは合理化の名をかりた人間虐待だという非難をうけることとなった。

前述のように Dickensは“Oliver Twist”の中でこの救貧院の実態を描き出し新救貧法の非人間性を徹底的に風刺し、攻撃し、心の奥底から湧きあがる情愛をもって貧しい人々を憐れみ、富める人々に向かっては飢えている同胞に対し慈悲を施せと説いたのである。

一方、Thomas Robert Malthus (1766-1834) によると「人口は制限されなければ幾何級数的に増加するが、食糧は算術級数的にしか増加しない。」<sup>(4)</sup>つまりこの世は常に人口過剰で食糧が足りなくなる恐れがある。従って日々の糧が得られず路頭に迷う者が出てくるが、これは決して社会に欠陥があるためではなく、人知の及ばない自然の法則であり避けることは出来ない。従って貧民は一生懸命働いて妻子を養える目途がつくまでは結婚しないことが望ましい、結婚したとしても自らの糊口に窮することのないように。また救貧制度に関して、貧民を救うという極めて慈善心に富んだ目的を持っているが、実際は貧民が家族扶養の力もないのにこの救貧法を当てにして結婚し、子供をつくり、食糧にありつけない貧民が新たに生じてくる。つまり救貧法のお陰で皮肉にも貧民が一層多く作り出されるというわけである。救貧法の世話になるような価値のない怠け者のために食糧が消費され、その為価値ある勤勉な、まともな者の食糧が不足して食糧価格の騰貴を引き起こし、救貧院外の人々の状態を抑

し下げ、彼等まで他人に頼る人間にしてしまう、と言うのである。つまり他人に頼らなければ生きてゆけない救貧院にいる人々は単に不面目なだけでなく自活している他の勤勉な貧民達の生活を破壊する有害な存在なのである。この Malthus の論旨は、貧民という「余計」な人口をどのようにして養うかではなく、どのようにして切り捨てるかということで、1834年の新救貧法に定められていることは Malthus の人口論を具体化したものにほかならない。

Scrooge は慈善金を集めに来た紳士から「貧しいもの達が救貧院へ行くくらいなら死んだ方が良い」と言っていると聞かされて、「それなら死んで過剰人口を減らしてくれた方が良い」(If they would rather die, they had better do it, and decrease the surplus population.) (I. p.51) と臆面もなく言い放つのである。Scrooge のこの発言には Malthus の人口論が意図されていることはあきらかである。これに対して Dickens は現在のクリスマスの精霊の口を借りて激しい憤りを込めて論難攻撃している。

人間よ、もしおまえに石の心でなく人間の心があるなら余分とは何であるか、何処にあるのかを悟るまではあんな悪意ある言葉は控えるがよい。どの様な人間は生きていてよく、どの様な人間は死ぬべきだなどと、おまえにきめられるのかね？ 神様の目から見ればこの貧乏人の子供よりもおまえのほうがよっぽど生きていても何の役にも立たない、生きるに値しない存在なのかもしれないぞ。

Man, if man you be in heart, not adamant, forbear that wicked cant until you have discovered What the surplus is, and Where it is. Will you decide what men shall live, what men shall die? It may be, that in the sight of Heaven, you are more worthless and less fit to live than millions like this poor man's child. (III. p.97)

卑俗化された功利主義とマルサス主義を身につけた無血冷酷な守銭奴 Scrooge も所詮は人の子であり、その意味では脆弱そのものの存在にすぎないのも事実である。七年前に死んだはずの Marley のことが今日にかぎって思い出され、又、慈善募金を集めに来た紳士の口からその名が語られたこともあり、頭の何処かに Marley のことが引っ掛かっていたのであろう、以前 Marley が所有していた住居へ帰るとドアのノッカーが突然 Marley の顔に見えてくる。目を据えてよく見ると次の瞬間にはノッカーにもどっているのだがこの些細な一件を契機に、あれほど冷酷無感動なはずの Scrooge が次第に落ち着きを失って行くのである。「くだらん、まやかした」(Humbug!) (I. p.56) と平静を装いながらも、一方ではテーブルやベッドの下、はては掛けてある化粧着の中まで Marley が隠れているような気がして覗いて

みる。それはもう半狂乱の状態である。こうなると Marley の幽霊の仕掛けた罠に Scrooge 自ら掛かってしまったようなもので Marley の幽霊は大きな顔をして堂々と出てくる。Marley は生前 Scrooge 同様自己の殻に閉じ籠ることを旨として他人との交わりを拒否し、公共の福祉に貢献するなどということは考えもしなかったのであるが、死んだ今、その罰として人間救済という任務を負わされているのである。彼の身体には生前の強欲がもたらした財産、即ち財布、帳簿、証文、金庫及び鍵といった世俗的な物がすべて鎖で巻き付けられており、これ等が今、彼を束縛し、苦しめている。Marley の幽霊はこの重荷を引き摺りながら現世の人々を訪ねては自分と同じ過失を繰返さぬようにと教える業苦を実行しているのである。

I am here to-night to warn you, that you have yet a chance and hope of escaping my fate. A chance and hope of my procuring, Ebenezer. (I. p.63)

「善意をもって働くこと」(working kindly) それかどのような所であろうとも、その小さな範囲の中で人の為役に立つということが人間としての「有用さを発揮するための大きな手段」(vast means of usefulness) であると Marley の幽霊から聞かされて、拝金主義者の Scrooge は今の自分の状態を考えて自己を弁護するように恐る恐る「でもあんたはいつも立派な事業家だったじゃないか」(But you were always a good man of business, Jacob.) と呟く。

Mankind was my business. The common welfare was my business; charity, mercy, forbearance, and benevolence, were, all, my business. The dealings of my trade were but a drop of water in the comprehensive ocean of my business! (I. p.62)

生前の自分の仕事は全く小さなもので、もっと人間としてすべき仕事があったのである。つまり「善意をもって働く」——善意とは、博愛、憐れみ、寛容、慈善であると Marley の幽霊はあくまでも人間中心的発想の言葉を吐く。結局 Scrooge は Marley の幽霊を介して過去、現在、未来の三人のクリスマスの幽霊に引き合わされる。彼等はル・サーージュ (Le Sage) の “Le Diable Boiteux”<sup>(5)</sup> の Asmodius よろしく Scrooge を連れて自在に空を飛び、屋根を剥がして Scrooge の失われた幼少年時代を playback して見せて孤独であった淋しさを思い出させ、「無知」と「貧困」という名の二人の子供の悍ましい姿を見せることで現在の社会的責任への自覚を促し、最後に Scrooge 自身の未来に於ける陰惨な死の運命を予告することにより恐怖心を煽り、慙愧させることで彼に人間性回復への道を辿らせる。

人間誰しも思い出したくない過去の一つや二つはあるものだが、過去のクリスマスの幽霊は頭の頂点から放射される光線で過去を再現して見せることが出来る。又、過去を見ながら人間はこの光線に extinguisher-cap (消灯帽) を被せることでその神通力を無力にすることも可能である。苛酷な過去であったが故にかたくなに過去に背を向けてきた Scrooge にとっては甚だ辛いことであるが幽霊の出現した目的が “Your welfare, Your reclamation” (II. p.69) であると知らされ、過去のクリスマスの場面を再訪する決心をする。

人は何故過去を簡単に忘れてたり、故意に葬り去ろうとするのか。クリスマスで子供達は皆口々に「クリスマスおめでとう」と言い交わしながら家路につき、がらんとした陰気な部屋に、貧しいが故に友達もなく一人とり残され、本の中にのみ楽しみを見い出している少年がしょんぼりとしているのを見つけた Scrooge は長い間記憶の奥に押し込んでいた幼時の孤独で、不幸だった我身の姿につまされて心から泣けてくるのである。と同時に夕べ事務所の戸口にキャロルを歌いに来た少年をにべもなく追い返してしまったことがひどく悔やまれる。  
I should like to have given him something. (I. p.73)

幼い頃の Scrooge は貧しかった為に無視され、疎外され、寂しく、孤独で不幸であった。思い出すのも辛いその過去を故意に葬り、かたくなに自分一人の殻に閉じ籠り常に現在だけを見つめてきたのだが、そうすることが不幸を生む原因となっていたのである。

この孤独で淋しい Scrooge の姿には、経済観念がまるで無かった Dickens の父 John のために12歳でウォーレン靴墨工場で少年労働者として働かされ孤独と屈辱に耐えていた Dickens の幼い日の姿が重ねられている。Dickens 自身当時のことは妻にも家族にも語らず長い間記憶の中に閉じ込めていたのである。

次に連れて行かれるのは Scrooge が徒弟奉公をしていた Fezziwig 商店でのクリスマスの場面である。Fezziwig 夫妻を中心に娘達、親類縁者、近所の貧しい人達それに二人の奉公人、勿論青年 Scrooge と Dick である、が集まり、仕事場を片付け、クリスマスの飾り付けをした部屋で飲み、歌い、ダンスに打ち興じて皆心から楽しんでいる。ここでは雇主も奉公人も無礼講でおおはしゃぎである。終われば Fezziwig 夫妻は一人ずつ皆と握手をし、また、誰もが「クリスマスおめでとう」と感謝の言葉を述べながら帰って行く。後に残った二人の奉公人 Scrooge と Dick は店の奥の帳場の下のベッドで Fezziwig 夫妻を褒めそやす。Scrooge は身も心も自分の前身と一体になり言うに言われぬ心の動揺を感じるのである。Scrooge のそんな心を見透かすように幽霊は “A small matter to make these silly folks so full of gratitude.…… He (Fezziwig) has spent but a few pounds of your mortal money: three or four, perhaps. Is that so much that he deserves this praise?” 「こういう愚かな連中をあのようになり難がらせるのは小さなことだな、せいぜい3ポンドか4ポンドのはした金を使っただけで



あのように褒められてよいものだろうか。」と言う。“It isn't that, Spirit. He has the power to render us happy or unhappy; to make our service light or burdensome; a pleasure or toil. Say that his power lies in words and looks; in things so slight and insignificant that it is impossible to add and count 'em up: what then? The happiness he gives, is quite as great as if it cost a fortune.”「金ではありません。Fezziwigさんは私達を幸せにも不幸にも出来るのです。私達の勤めを楽にも辛くもし、楽しみにも労苦にもする力を持っています。その力は、言葉のなかにも表情のなかにもあり、また、すべてを勘定することもできないほど、ごく小さなつまらないことのなかにあるのだと言ったってそれがなんでしょう？あの子の与える幸福は、ひと財産を使ったほどに大きいのです。」(II. p.78) Scroogeは現在の自分ではなく昔の自分になって思わず言ったのである。Fezziwigにひきかえ、現在のScroogeはただ一人の雇人Bob Cratchitを週15シリングという薄給でこき使い、可哀相にBobは外套一枚買えずに白い毛糸のマフラーで暖をとっている。Scroogeはどんなに寒い日でも暖炉に石炭を赤々と燃やすことを許さず、石炭入れは自分の手元に置いて管理している。また二人を隔てている扉を開け放したままで、Bobの働き具合を監視し、気にいらないと「わしと君はどうしても別れなければならないね」(I.p.47)と何時でも解雇する用意があると言わんばかりの恐ろしい目で睨むのである。ScroogeがFezziwig商店で奉公していた頃の事を思い出さずれば二人の関係はもう少し異なったものとなっていたであろう。Strange to have forgotten it for so many years! (II. p.70) 当時Dickensは財産の不平等をなくすというような社会主義的な考えではなく、貧しい者には扶助を受ける権利があり、一方指導者階級は社会悪に対して責任がある。つまり、彼等は無知なる者、弱い者に対して、父が子に対して持つような自然の権威を持っているのであり、個人或るいは国家が下層階級の生活に介入する必要があると考えていた。したがってScroogeはCratchitが気持ち良く仕事出来る環境を与え、給料も上げてやれば、社会の平和に寄与したことになるであろうし、すべての親方が皆Fezziwigのように職人を仲間として扱っていたなら憎しみなど生まれはしないというわけである。このように見てゆくとScroogeとCratchitの関係は使用人を苛め、虐げ、締あげる単に高圧的で利己主義な雇用者とその前に身を屈している使用人という関係だけではなく、そこには「為すに任せよ！行くに任せよ！」(“laissez-faire, laissez-passer”)の合言葉のもとに、飽くことを知らぬ金銭欲を合理化して、私服を肥やしていった功利主義者と、鞭打たれ、締上げられ、搾取された「飢餓の40年代」の危機的状況に喘いだ庶民という、当時の社会の構図が象徴的に描き出されていることがわかる<sup>(6)</sup>。

壮年期のScroogeはすでに「貧乏ほど、世の中が辛くあたるものはない。」(I. p.79)との思いから慰めを恋人にではなく、黄金(A golden one)に求めたため婚約者は彼のもとから

去っていった。彼女は今では結婚し、子供達に囲まれて幸せなクリスマスを祝っている。この家の主人が、娘を自分に甘えかかるようにもたれさせ、娘と母親と共に、炉ばたに腰掛ける。その様子を見て、Scroogeは自らが捨てた幸せと現在の自分のうらぶれた姿を重ねて涙を流す。次々と見せられる自らの過去のさまざまな悲しみや喜びを追体験することによってScroogeは涙を流し、自己中心の小さな世界から次第に脱出してゆくのであるが、流す涙と共に人間Scroogeも少しずつ蘇生してくる。

続いて現れる「現在」のクリスマスの幽霊はすこぶる元気のよい巨人である。Scroogeはこの幽霊と共にクリスマス・イブのロンドンの街を見てまわる。どんよりとした空、屋根の上の白い雪、それと対象をなす黒く汚れた路上の雪。その上には馬車や荷車の重い車輪が刻んだ深い轍が重なりあい、どれがどれだか分からぬほどに入り組んだ水路を作っている。すぐ行き止まりになる短い路地には薄汚れた霧が煙突から出るススに塗れて黒い粒となって雨のように降り注ぐ。空模様は決して心を浮き立たせるものではないが、辺りにはよく晴れた夏の日にさえも見られないほどの華やいだ気分が漲っている。食料品店には所狭しとばかりに色あいもよく品々が並べられ、クリスマスの買い物に胸おどらせ心急ぐ思いのお客で立込んでいる。誰の顔も明るく陽気な笑いではち切れそうである。こうしたクリスマスの情景描写はDickensの独壇場である。幽霊がScroogeを案内したのはBob Cratchitの家である。週15シリングの薄給では生活は決して楽ではない。二度も裏返して縫い直した粗末なドレスを6ペンスのリボンで見違えるほど引き立てて着ているCratchit夫人はクリスマスの準備に余念がない。お父さんから譲られたシャツのカラーの中に耳まで埋もれて得意になって料理作りを手伝っている長男のPeter、彼は少年時代のDickens同様、質屋通いをやらされることも度々である。apple-sauceを甘くしているBelinda嬢、それにもう一人の息子と娘、この二人はパン屋の近くでかまどに焼ける鶯鳥の匂いに鼻をひくつかせている。それに不治の病にかかっている不具のTiny Tim、そこへ婦人帽子店の見習いをしている長女のMarthaがクリスマス休暇で帰ってくる。クリスマスの食卓には年一度だからこそなけなしの金をはたいて買い込んだ何処にもないほどの鶯鳥(There never was such a goose., ——八人家族には決して十分な大きさとはいえない——)がデンと据えられてある。柵を飾ったクリスマス・プディングにブランデーを垂らして火をつけ、出来具合を心配しながら運んでくるCratchit夫人。つい今しがた雇主のScroogeからクリスマス休暇のことで嫌味を言われたばかりなのにそのScroogeの健康を祝して乾杯をしようと言うCratchit氏。名もなく貧しい庶民、これと言って特に勝れたものがあるわけではない。いい着物を着ているわけではない、穴があき水が染み込む靴を履いている。しかし落ちぶれやつれた様子は少しもない。皆陽気で感謝の気持ちを持ち、一緒に幸せである術を知っている。これこそDickensが庶民に手本にするよう

にと忠告する家族の姿である。

Scrooge の甥の Fred の家でも数人の友人を招いてクリスマスを祝っている最中である。招待しても来ない Scrooge を思って Fred は大笑いしながら, “He said that Christmas was a humbug, as I live! He believed it too.” (II. p.51) クリスマスを心から祝い, 信じている一同は Fred につられて腹をかかえて笑う。だが Fred の妻は Fred が貧乏なのに一人前に恋をして結婚したとって叱ってばかりいて, 一度も会ってくれようとしないう Scrooge の非人間性を非難する。しかし Fred は

……his offences carry their own punishment, and I have nothing to say against him.  
(II. P.102)

I am sorry for him; I couldn't be angry with him if I tried. Who suffers by his ill whims! Himself, always. Here, he takes it into his head to dislike us, and he won't come and dine with us. What's the consequence? He don't lose much of a dinner. (II. P.103)  
「その報いはいつか罰となって自分に戻ってくる, だから僕がここでとやかく言うことはない。」

「僕はあの人を気の毒に思う。あの人には怒ろうと思っても怒れないんだ。あの人 of 意地の悪いむら気で悩むのは誰かね? 何時でもあの人自身じゃないか。今度だって, あの方は僕たちを好かないと思ひ込んでしまうと, もうここへ来て僕たちと一緒にご飯をたべようとしないうのさ。その結果はどういうことかね? そう大したご馳走を食べそこなうたわけでもないじゃないか。」

と言う。Fred は Scrooge のように「死にたい人は死ぬがいい」と冷たい態度で突き放すのではなく, 善意をもって Scrooge にクリスマスの意味, 人との交わりの必要性を説き聞かせてゆこうとの暖かさがある。

……the only time I know of, in the long calendar of the year, when men and women seem by one consent to open their shut-up hearts freely, and to think of people below them as if they really were fellow-passengers to the grave, and not another race of creatures bound on other journeys. (I. p.49)

社会的地位や金銭の有無にかかわらず人は共通の死に向かって旅をしている fellow-passengers なのである, という同胞意識こそが人間認識の基底であるという考えをもつ Fred であればこそ叔父 Scrooge に何を言われようと, 毎年 “A Merry Christmas, uncle! God save you!” と快活に言えるのである。Fred 達の他愛ないゲームで子供にかえって楽しく過ごし, Fred

の母の好きだった曲を聞かされたScroogeの心はますます和らぎ、「自分の手で人の世の優しさを探り当て自分も幸せになれたものを……」としみじみ思うのである。だがScroogeの前に突然現実がつきつけられる。精霊の衣のひだの間から現れ足元に膝まづく二人の人間の子供、「無知」(Ignorance)と「貧困」(Want)である。その額には「運命」(Doom)という文字が刻まれている。貧しいながらもクリスマスの食卓を囲む賑やかな子供たちの笑い声に溢れた幸せな家庭があれば、その一方で幼児労働、工場主の利己心の犠牲になった者達、現在の社会秩序が無責任にも犠牲にした犯罪者、放浪者、落伍者等がいる。彼等は精霊という超自然の力に縋らなければ貧困と犯罪から免れることは出来ないのであろうか、運命だから致し方ないのだと手をこまぬいて見ている社会にたいする痛烈な皮肉が込められている。「この子等に救済の道はないのですか」(“Have they no refuge or resource?)(III. P.109)「監獄があるだろう」「救貧院があるだろう」と慈善を拒否する言葉しか吐かなかったScroogeは過去のクリスマスの精霊によって貧しく、孤独であった子供の頃の姿を見せられて久しく忘れていた若い頃の悲しみや喜びの気持ちを追体験し、またTiny Timの必死に生きようとす健気な姿に人の命の尊さを教えられ共感する気持ちが呼び覚まされており、思わず口ばしした言葉であった。

次に未来の精霊の導きでScroogeは再編可能な未来の人生を現在として体験するのであるが、現在のクリスマスが陽気な笑いと歓喜とペイソスのるつぼであった明るい世界は一転して「罪と汚濁と悲惨」(crime, filth, and misery)(IV. P.114)に満ちた暗い世界となっている。いつもの取引所では商人達が集まって誰かが死んだらしいと話しをしている。その人の名は口にするのも悍ましいというわけであろう。ロンドンの何処かの場末では雑役婦、洗濯女、葬儀屋達が持ち寄った盗品が売買されている。そこへ死にかけていた病人の所から剥ぎ取ってきたというカーテン、毛布とシャツが持ち込まれてくる。これ等もその名を口にするのも悍ましい人の持ち物であったという。精霊に導かれてがらんとしたその人の家へ入ると、カーテンも掛かっていないベッドの上にぼろぼろのシーツに覆われて、身ぐるみ剥がれ、奪い取られ、見守る者もその死を悲しみ泣いてくれる者もなく、その人の死体が横たわっていた。誰だろうScrooge自身の死骸であった。それを見たScroogeは自分の死が負債者を喜ばせるだけのものでしかないことを知って愕然とする。Scroogeのこの悲惨な死とTiny Timの死は非常に対照的である。Cratchit家では母親と子供達が暖炉の周りに集まっている。静かである。二人の喧しい子供達は片隅に彫像のように座って動かない。銘々が他の人達の苦しみを思い自らの苦痛に耐えている。父親のBobは何時になくゆっくりと仕事から帰ってくる。彼の元気のない様子からTimへの同じ悲しみの思いを共有している家族は濃やかな心ずかいをし、申し合わせたようにTimのことについては沈黙を守っている。クリスマスを思い

切り楽しく幸せに過ごす術を知っている Cratchit 家の同じ家族が Tiny Tim の死によって今度はこの不幸せを皆一緒に耐えてゆこうというのである。彼等は Scrooge のように排他的になって自分の殻の中に閉じ籠るのではなく、常に相手を思いやり、献身的に尽くしてゆく。そこには犠牲を厭わない天真爛漫な気前の良さがある。病人や貧しい者達に向かって、死にたい者は死んだ方がかえって人口を減らす (decrease the surplus population) (I. p.51) と平然と口にした Scrooge は自分の軽率さが悔やまれ悲嘆にくれる。こうして他人の苦境や困難や悲しみなど歯牙にも掛けなかった Scrooge は精霊に導かれて過去、現在、未来の自分の姿をとおしてさまざまな煉獄 (purgatory) を体験し、呵責と悔恨の念に耐えきれなくなり、子供のように涙を流す。

Scrooge が改心して本当の意味で人間回復をするのは、一夜明けて目の前に全く別の世界が展開されるクリスマスの日である。生きている喜びと、まだ改心が間に合うと知った Scrooge は喜びの「くつつつ笑い」(chuckle) をしながら得意満面で Bob Cratchit 家に見事な鶯鳥を贈り、甥の Fred 夫妻と一緒にクリスマスを祝うのである。

ところで Scrooge のような「憎らしい、しみったれの因業な、情け知らずの男」(an odious, stingy, hard, unfeeling man) (III. p.98) が一晩夢の中で精霊を見ただけで掌を返したように罪を悔い改め寛大な善人に生まれ変わるなどということは子供はいざ知らず、大人であれば本気で考える者は誰一人いないであろう。クリスマスの興奮が鎮まれば Scrooge も元の因業爺さんに戻るだろうことは大人の間では公然の秘密として誰もが納得していることである<sup>(7)</sup>。しかし世知辛い現実の社会で Scrooge によって代表される功利主義者に心を入れ替えさせるには幽霊という超自然の力を借りるしか手立ては無いのであろう。そのように考える時“A Christmas Carol”は大人達にとっての願いを込めた“おとぎ話”といっても過言ではないと思う。

“A Christmas Carol”に先立つこと7年前、Dickens は“Pickwick Papers”(1836-37)の29章に Scrooge と同じように偏屈で人間嫌いの墓掘り男 Gabriel Grub がクリスマス前夜に墓場で鬼にさらわれ、そのまま住処である穴蔵へ引き摺り込まれ、そこで貧しく、無学ではあるが自然の慈愛に溢れた顔をした人々が明るく陽気に笑い騒いでいる姿を見せられ、他の人々が陽気に笑い、騒いでいるのを見てぶつくさ言う自分こそこの地上にはびこる一番の不愉快な雑草であることを悟り、改心する話しを書き上げている。

この Gabrielこそ Scrooge の原型であるが、この二人の中に7年の時間を経た後の Dickens 自身の社会意識の変化がはっきりと見られる。Gabriel が改心することで、物事の現象に捕らわれ、その本質を見失ってはならないという教訓を伝えたにすぎないのだが、Scrooge には富める者の貧しい者への救済という義務、つまり「社会自身に心を入れ替えさ

せる」(a plea for society itself to undergo a change of heart) という Dickens 自身の意図が込められているのである<sup>(8)</sup>。

「世界の工場」といわれ「進歩と繁栄」を合言葉に目ざましい経済的繁栄を遂げていく一方で国内では社会の最上層の金持ちと最下層の貧民の間の隔たりが著しく増大し、農村や市場町の生活は都市化され、そこには工業化によって機械工をはじめとする熟練職種の労働者と不熟練労働者やスラム居住者との間に比較にならないほどの生活水準の差が出てきた。ディズレーリが著書「シビル」の中で述べた富者と貧者の二つの国民どころかもっと多くの「国民」が当時のイギリスには存在したのである。「飢餓の40年代」は打続く不況のため借地農業者にとっては苦しい時代であり、さらにその下に雇われている人々の生活は悲惨なものであった。新興ブルジュアジーこそ社会の改革を担い、推進する実力と可能性をもつ階級であると信じていた Dickens は初期の作品の中では善意と慈善に満ちた実業家 (a man of business) (“Pickwick Papers” の Pickwick 氏, “Oliver Twist” の Mr. Brownlow, “Old Curiosity Shop” の Mr. Garland 等) を社会の不正を正し、貧しい者に金銭を恵み、悩める者を救ってくれる存在として描いていた。しかし工業化や都市化のもたらす傲慢、偽善、スラム街の腐敗、慈善団体の貧弱等、社会の歪みと矛盾が激しい軋轢と闘争を生み出してゆく中で悪がはびこり不幸が生じてくる。人間の性は善の筈だったが近代の都市はむしろ悪と罪の温床となり生活力の乏しい者はその餌食になっていく。Dickens は愛情や善意だけでは世の中を救済することはもはや不可能であることに気づき、中期以降の作品は前期の屈託のない明るさは無くなり、暗い感じが漂い社会問題に一層の関心がよせられ、人物の心の内面に目が注がれていく。従って改心後の Scrooge は Dickens が個人の力で社会を変え得るような慈善心と親切心をそなえさせて社会へ送り出した最後の人であると言える。

功利主義が世にはびこれば損得勘定に明け暮れる味気無い Scrooge のような人間が多く輩出してくるのは必定であり、そうなれば愛や人情はどれ程期待出来るであろう。善人であれ悪人であれ普段は損得勘定に明け暮れていても年一度のクリスマスの日だけは互いに優しい言葉を掛け合い、心から打ち解け、遠くにいる者のことを思い、また相手も自分のことと気づかってくれることを知り、人々の心に親睦の情が目覚める陽気さと雅量が欲しいものだと考えていた Dickens は “A Christmas Carol” 以降の作品の中でも彼特有のクリスマスを演出している。戸外の厳しい寒さ、窓一つ隔てた部屋の中には赤々と燃える暖炉、中の詰め物が溢れ出しそうな鶯鳥、クリスマス・プディング、温かいパンチ、それらを見つめる子供達の輝く目、賑やかな笑い声、この日ばかりは大人達も現実の桎梏を解き放たれて無何有の郷に

生きる。このクリスマスの精神が一日で終わらず常日頃の枯渇した人間関係に対する「象徴的批判」(a symbolic criticism)<sup>(9)</sup>として“A Christmas Carol”の中に描かれているのも確かである。同時代に活躍したある意味でライバルであった作家 Thackeray は“The Fraser’s Magazine” (Feb. 1844) に寄せた一文の中で「この作品の全読者に対して [あなたは] 身をもってこの善行をされた」と言い、さらに「国家的利益」(a national benefit)<sup>(10)</sup>と述べて最高の賛辞を贈っている。

#### 注

- (1) アンドレ・モロア：「ディケンズ論」P.11 (弥生書房, 1957)
- (2) John Forster: *The Life of Charles Dickens* Vol. I, P.283 (Everyman’s Library, 1967)
- (3) ルイ・カザミアン：「イギリスの社会小説 1830-1850」P.160 (研究社, 1958)
- (4) Thomas Malthus: *An Essey on the Principle of Population* 1st ed. P.9, 33 (The Modern Library, 1960)
- (5) Le Sage: *Le Diable Boiteux* (1707, 1726年改作) 「悪漢小説集」2 集英社版世界文学全集  
19世紀に於ける都市の膨脹と都市生活の複雑化に伴い見えざる現実が意識され、それに対する暴露的な関心が起こり、アスモディアスのイメージが導入されだした。  
Nathaniel Hawthorne の *Twice Told Tales*, Thomas Carlyle の「フランス革命」等の中にアスモディアスの言及があり、Dickens も“A Christmas Carol”の構想を練り始めた頃アスモディアスの物語が頭の中にあっただと思われる。
- (6) Michael Slater: Introduction to *The Christmas Books* (Penguin, Vol.1 pp.xiii-xiv, 1971)
- (7) Edmund Wilson: “Dickens: *The Two Scrooges*” in *The Wound and the Bow* (Methuen, 1961 P.57)
- (8) Ibid., P. 487.
- (9) Edgar Johnson: *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph* (N.Y.: Simon & Schuster Vol. 1, P.483, 1952)
- (10) Philip Collins (ed.): *Dickens: The Critical Heritage* (Routledge and Kegan Paul, P.149. 1971)

#### Textbook:

*The Christmas Books*: Volume 1. (The Penguin English Library)

#### 参考文献

- Humphry House: *Dickens World* (Oxford U.P., 1961)
- Harry Stone: *Dickens and the Invisible World: Fairy Tales, Fantasy and Novel-making* (The Macmillan Press Ltd., 1979)
- Joseph Gold: *Charles Dickens, Radical Moralists* (The Copp Clark Publishing Company, Tront 1972)
- Deborah A. Thomas: *Dickens and the Short Story* (University of Pennsylvania Press Philadelphia 1984)
- マルサス：永井義雄訳：「人口論」(中央文庫)
- トレヴェリアン，松浦，今井訳：「イギリス社会史」2 (みすず書房 1983年)